

硬式野球部の活動について

硬式野球部 監督 安田 涼

1. 部略史

◆神港（第一神港商業）

- ・大正6年創部
- ・春の選抜甲子園 出場8回・優勝2回（2連覇）
- ※選抜甲子園史上2連覇は、
第一神港商業・PL学園・大阪桐蔭の
3校しか達成していない偉業
- ・夏の甲子園大会 出場7回 最高ベスト4

◆兵庫商業（北神商業）

- ・昭和5年創部
- ・春の選抜甲子園 出場1回
ベスト8
- ・夏の甲子園大会 出場1回

◆神港橋

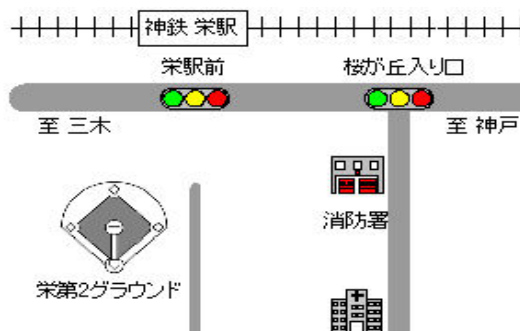
- ・平成28年4月、2校の歴史と伝統を受け継ぎ開校・創部
- ・平成29年7月まで神港高校・神港橋高校の合同チームとして始動
- ・平成29年8月より神港橋高校単独チームとして始動。
- ・平成30年・夏 初勝利・3回戦進出
- ・令和元年・夏 シード校撃破・4回戦進出
- ・令和2年・夏季兵庫県高等学校野球大会にてベスト8進出。敢闘賞を受賞



2. 活動場所

◆栄第二グラウンド

- ・神戸市西区押部谷町栄字南山 848
- ・神戸電鉄 三木方面 栄駅下車 徒歩8分
- ・敷地面積 26,940 m²
- ・両翼95M 中堅110Mの本格的な野球専用グラウンド
(内野黒土・LED夜間照明・屋根付きブルペンなど有)
- ※授業終了後電車で移動



3. 部員数（令和2年度）

- ・3年生25名 女子マネージャー 2名
 - ・2年生14名 女子マネージャー 2名
 - ・1年生15名 女子マネージャー 3名
- 合計61名



4. スタッフ

- 監督 安田 涼 (保健体育)
- 部長 栗本賢明 (商業)
- 顧問 田邊啓太郎 (商業)・城井直史 (商業)
長谷川佑都 (保健体育)・須谷真由美 (商業)
- 外部コーチ 塩飽隆成 (技術)・長谷川右司 (トレーナー)
山野仁志 (理学療法士)・定時 徹 (鍼灸師)

5. 活動方針

◆目標

『神港橋高校の校歌を甲子園で響かせる』

『市神港・兵庫商業の歴史と伝統を受け継ぎ、神港橋として高校野球史に歴史を刻む』

◆目的

『高校野球を通じて多くの挑戦と失敗と出会いを経験し、社会で必要とされる野球もできるいい男になる』



6. 令和2年・夏季兵庫県高等学校野球大会を振り返って

前年秋の新人戦で惨敗してから心に火がつき、それ以降の市内親善大会・県親善大会・市高大会と全て優勝することができました。自信をつけたチームは、本気で夏の甲子園出場をイメージして冬の練習に熱く取り組んでいました。

手応えを感じてシーズン開幕を迎える直前に、コロナにより全てがストップし、最大の目標でもあった夏の甲子園大会も中止が決定されました。わずかな可能性を信じて、限られた環境で努力を続けてきた選手たちの落胆は言葉では表せないものでした。我々スタッフも彼らにかける言葉が見つからないという状態でした。

兵庫県独自の代替大会がベスト8で打ち切りという条件ではありましたが開催されました。競技としてやる野球は高校まで決めていた選手が大半を占めるので、野球との区切りをつける機会ができたことはとても有り難く、開催・運営に携わってくださった多くの関係者の方々への感謝の思いでいっぱいでした。

チームとしての目標は、①秋の大会以降無敗で終わる。②勝って有終の美を飾る。例年なら勝って高校野球を終えられるのは全国で1校だけ。③3年生全員出場。の3つでしたが、全てを達成できました。特に③の目標に関しては、例年ならベンチ入りメンバーの変更はできないが、今年は試合ごとに入れ替えが可能でしたので、3年生が25名いる我々にとっては有り難かったです。選手たちの活躍により、全員がベンチに入るだけでなく試合に出場することができました。このベンチの一体感は歴代ナンバーワンと言えるものでした。

最後の試合の前日の練習は、甲子園の決勝戦に進んだ学校しか味わえない、明確に「今日が最後の練習」ということが分かったうえでの練習、という不思議な感覚でした。とてもリラックスした雰囲気での練習ができました。

最終戦の最終回に、これまた不思議な光景に出会いました。勝利まであと1アウトのところ、1人2人3人と泣いているんです。最後には嗚咽が漏れる状態で、それにつられて涙が伝染していきます。想定していたのは、勝って「ヨッシャー」と拳を突き上げて喜びを爆発させている映像でした。涙も「やったぞ」という達成感の涙をイメージしていましたが、彼らが流している涙は、「もう本当にこれで終わりなんだ」「もうこのメンバーで野球することもないんだ」という寂しさの涙でした。「勝っても先がない」という悔しさの涙でもあったのかもしれない。野球人生で初めての味わった感情でした。

失ったものはあまりにも大きかったですが、得られたことがあるとしたらこの感情を味わえたことです。この夏のことは一生忘れないでしょう。

彼らの今後の人生での活躍を祈るとともに、この困難な状況下においていろんな感情を抱えながらもチームとして一つになり、歴史に名を刻んだ彼らにいつの日かまたスポットライトを当てられるように、甲子園で神港橋高校の校歌を響かせることに今後もチャレンジし続けていきます。

